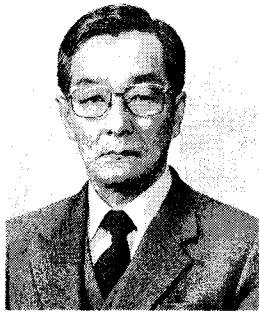


平成3年を迎えて

日本熱測定学会会長 谷口雅男
神奈川工科大学教授



平成3年の年頭にあたり、会員の皆様にご挨拶をお送りいたします。皆様にはお元気に新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

平成元年11月に本学会の会長をお引き受けして、早くも1年以上が経過いたしました。その間、恒例の熱

測定講習会(2回 東京、京都)、ワークショップ(2回 東京、大阪)、第2回日中熱測定シンポジウム(大阪)ならびに第26回熱測定討論会(福岡)などを成功裡に行うことが出来ました。また出版関係、グループ活動、および国際協力なども例年通り活発に行われました。これとても、本学会の充実した歴史的変遷と伝統ならびに会員の皆様の絶大なるご支援の賜であり、ここに改めて厚くお礼申し上げます。

さて、本学会の活動の変遷〔1984年までは日本熱測定学会の歩みなどの資料(熱測定15, 209(1984))をご参照下さい)を会員数により顧りみますと、1969年、熱測定研究会発足当時は、一般会員319名、維持会員27社でありました。折から、第5回熱測定討論会(大阪)が開催されており、発表件数58件、参加者339名と記録にみられます。1974年、第10回熱測定討論会会場に於て、日本熱測定学会の第1回通常総会が開催され、正会員634名、維持会員52社と報告されました。その後の会員数は、最近5年間では次のような次第であります。〔'85〕: 正会員(698人)、維持会員(34社)、〔'86〕: (704)、(33)、〔'87〕: (737)、(33)、〔'88〕: (782)、(35)、〔'89〕: (820)、(39)、〔'90〕: (857)、(36)。正会員数と'69~'90年の間の各年とをプロットしますと、研究会から学会への移行の5年間('74)に急激な倍増の伸びの曲線となり、その後'82年までは殆ど変化が見られない平坦部があり、'82年頃から現在まではかなりの直線的伸び率を示す階段型の曲線がえられまし

た。一方、本学会の顔である熱測定討論会に関する統計的資料をまとめ、詳しく検討していませんが、本学会発足時の第10回討論会('74東京)では、発表件数88件、参加者317名、第25回記念の討論会('89・大阪)では、発表件数106件、参加者257名、第26回討論会('90・九州大学)では、発表件数103件、参加者223名であり、過去10年以上の間、発表件数は100件前後、参加者数200名以上と極端な変動はみられません。

本学会活動の伸びの尺度は、会員数の伸びと討論会の内容、活発さ、恒例の各種の集会、グループならびに出版活動などの相乗積で示されるのかも知れません。

私がここに諸数字をあげたのは、今後の本学会の活動、発展の方向はどうあるべきかの問題提起を会員の皆様にさせていただきたかったからであります。

当学会会則の第2章に、“本会の目的は、……熱測定に関する科学および技術の研究と応用を促進することにある”。とありますが、'90年代は、正に“研究と応用を促進する転換期に入る”のではないのでしょうか。第1回の討論会('65年)のプログラム(30件)と、第26回('90年、103件)のそれを較べると、件数とプログラム編成の整理による見易さの差異こそあれ、熱測定テーマに関する本質的な差異がある様には見うけられません。会則により定義されている熱測定は本来、地味な、着実な積み重ねによる進歩が期待される分野と思われまますので、飛躍的差異がなくて当然かも知れません。しかし、たとえば昨年の討論会にみられるように、酸化物超伝導体、生体、液晶、などなど、25年前頃には見かけなかった項目などから、昨今の材料、エネルギー、バイオ、環境など、周囲からの問題提起の事情をかいま見ることもできます。私事ですが、私の研究は、よく定義された固体物質の熱測定であり、材料とはお世辞にもいえない次第です。しかし私の弟子達の世代は、材料を念頭においた物質を指向し、発展が期待される昨今です。

上記の“研究とその応用”、のとらえ方は、皆様各人各様であると存じます。しかし、年々、講習会には殆ど企業の方々のご出席ですが(平均80~90名位)、熱測定を通らずには応用の進歩がないという時代の到来であることは確かのようなのです。

'80年代の会員増の内容の検討はしていませんが、'90年代は、学会としても、上述した“恒例の…”の内容についてもマンネリになることなく、何か対応を意識すべき時期と思います。どうぞご意見をお聞かせ

下さい。

さて、今年の学会の行事であります。集会関係としては、グループ会合（熱測定応用研究、熱力学データベース、分圧制御ソフト開発）が3件（都合6回）、第27回熱測定討論会（11・6～8 京都：京都大学の中西浩一郎先生のお世話による。また日本熱物性学会と同一の会場で合同の討論会を開催）。熱測定講習会（2

回）ならびに熱測定ワークショップ（2回）などが予定されております。共催、協賛、後援関係は9件にのぼります。また会誌、新熱測定の進歩の他に会員名簿の発行を予定しております。

おわりに、会員の皆様の本年の御健勝と御研究の益々発展されること祈念申し上げます。

BCT再刊のお知らせ

先に Bulletin of Chemical Thermodynamics 出版物の危機的状況についてご報告しましたが、漸く再出版のメドが立ち、29巻(1986)、30巻(1987)が一冊にまとまって、1月始めに出版されました。前にも述べましたが、NIST(旧NBS)からの援助がなくなりましたので、前年度発行の化学熱力学関係の論文リストは削除され、本刊行物の原点に戻って、測定は終わったが未発表の物質のデータ集になりました。しかし、このリストだけでも研究の無駄な重複を避ける上で、あるいは世界の動向を知る上で貴重なものと考えられます。財政的援助も得られましたので、この一冊に限り、昨年発刊の28巻購入者には無料で送られている筈です。しかし、Freeman 教授の退官と後任難のため、本刊行物をもってBCTの発刊が最後になるかもしれないことは、誠に残念です。今後の問題は今夏のIUPAC総会で議論されると思います。

バックナンバーの50%価格での購入が可能です。価格は下表の通りです。\$50以上送金されますと、郵便代や

手数料はこの価格に含まれますが、それ以下ですと一冊につき\$5.00が必要です。前払いの方が有利ですが、そ

巻	価格 (US\$)	巻	価格 (US\$)
9→11	5	25→27	20
12→20	10	28	25
21→24	15	29/30	10

れができない機関ではinvoiceを請求できます(手数料\$10.00)。申込み先は次の通りです。

Entropology Unlimited
116 So. Kings Street
Stillwater, OK 74074-2513
USA

なお、私の所に新版を余分に送って来ておりますので、申込み先着順4名の方に無料でお届けします。

大阪大学理学部 菅 宏
(電) 06-844-1151
内線 4200